

かわせみ通信

発行：神奈川県自然環境保全センター
自然保護課

住所：神奈川県厚木市七沢657

TEL：046-248-6682

野外施設自然情報

バックナンバーは
HPから見られます→

自然環境保全センターの野外施設では、それぞれの季節に、生き物同士の巧みなつながりや、興味深い生命活動など、大自然の不思議な現象にふれることができます。この「かわせみ通信」では、野外施設の出来事や生き物たちの様子を紹介しています。

野外施設トピックス（2023年6月～8月）

日付	場所	できごと
6月～	雑木林など	ツツドリ鳴く 例年、サンコウチョウやホトトギスなどの夏鳥のさえずりが賑やかですが、今年はツツドリのさえずりが頻繁に聞こえました
7月～	自然観察園	セミ鳴き始め 職員が認識した限りでは、7月1日にニイニイゼミ、27日にツクツクボウシ、28日にクマゼミの声を確認しました
7月27日	自然観察園 Y22、23付近	ザリガニ捕獲調査スタート 農林水産省との協働で、自然観察園の池のアメリカザリガニを罠を使って捕獲する調査が始まりました



ザリガニ捕獲装置

<ミクリの花が咲きました>

昨年、自然観察園のもと池だった場所で採取した土からシャジクモやイボクサ、ミクリが育ったことを第29号でご紹介しました。今年も春先に採取した土を、水を張ったコンテナに入れたところ、たくさんのミクリが育ち、7月から8月にかけて花が咲いているのが確認できました。ミクリは約30年前の野外施設の植物目録（自然保護センター報告第9号）に記録がありますが、アメリカザリガニの増加や陸化が進んだ現在の谷戸ではほぼ見られません。

ミクリの花は雄花と雌花が分かれています。枝の下にあるのが雌花で、白い雌しべを1つつけた小さな花が複数集まっています。枝の上にあるのが雄花でこちらも小さな花の集合体です。同じ株の花同士で受粉するのを防ぐため、雄花は雌花より遅れて開花します。

発芽したミクリのうち1株は同じくコンテナで育ったシャジクモとともに谷戸の池に沈めた籠の中にも移植しました。籠は周囲に網を張ってザリガニが中に入れないようにしてあり、食べられたりハサミで切られたりすることはなく成長はしていますが、日当たりがよくないことも影響しているのか、今年は花が咲くことはありませんでした。池の籠の中と外側の違いをみなさんも観察してみてください。



開花した雄花

雄花

雌花

ミクリの花

<マヤランが咲きました>



雑木林のエリアでマヤランが確認されました。菌類と共生して栄養を得る菌従属栄養植物です。落ち葉などが豊富な常緑広葉樹林の林床に生え、県内では近年増加傾向であるようです。園内でも2010年頃から確認されるようになりました。クヌギやコナラが太木になり、落ち葉が堆積し、マヤランの生育に適した環境になってきたからでしょうか。（写真は9月3日撮影）



コンテナの様子（Y9付近）

カミキリムシを探してみよう

＜カミキリムシってどんな虫？＞

みなさんはカミキリムシについてどのようなイメージを持っていますか？「昆虫採集のときみつけるとちょっとうれしい虫」、それとも「植物を傷つけてしまう困った虫」でしょうか。

よく知られているゴマダラカミキリは、体長25～35mmの大型の甲虫で、成虫、幼虫ともにミカンなどの木を食べます。幼虫が材を食べて穴が開くことで木が枯れてしまうことがあります。しかし、このような大型の種は、多くのカミキリムシ類のほんの一部にすぎません。カミキリムシの仲間は、ちょっとした緑地があれば少なくとも60種類程度、多いところでは100種類以上います。しかし、そのほとんどが10mm程度の大きさであるため、あまり気づかれない存在なのではないかと思います。模様が美しいもの、小さくてかわいらしいものなど、多種多様なカミキリムシたちを探すにはどうしたらよいのでしょうか。



↑ゴマダラカミキリ
大きく、艶のある黒い体は目につきやすい



クモガタケシカミキリは
体長3.5～6mmと小型→

＜ポイント① さまざまな植物を見る＞

カミキリムシはそれぞれ食事や産卵に利用する植物が異なり、生きた植物を利用するものと、枯れた木を利用するものがあります。「カミキリ探し」でまず注目してほしいのは、土場（どば）と言われる伐採した木を積んでおく場所です。土場にはルリボシカミキリやキスジトラカミキリなどの枯れたり弱ったりした木が好きな種が多く集まってきます。木の種類（針葉樹か広葉樹かなど）や木が伐採されてからの時間、木の乾燥具合によっても集まる種類が異なります。

枯れた木に集まるカミキリムシを見つけられたら、次は生きた木につく種類も探してみましょう。食草が紹介されている図鑑などでそれぞれが好む木を確認してから、実際にその木の近くで探してみる方法もありますが、見つけたカミキリムシがついていた植物の種類をヒントに、カミキリムシの種類を調べることもできるでしょう。虫を探すうえで植物を見分けることは大切です。さまざまな種類の植物、材木を見比べることが多くのカミキリムシを見つけるポイントです。



ルリボシカミキリ

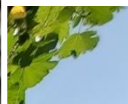
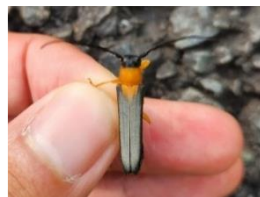


キスジトラカミキリ

土場は木が積み重なって危険な場合があるので上に登らないようにしましょう。また、その場所の所有者や管理者の許可をとって観察しましょう。

＜ポイント② 食痕を探す＞

木を見つけたら、カミキリムシのつけた痕を探しましょう。シラハタリンゴカミキリはスイカズラの葉を、フチグロツヤボシカミキリはホオノキの葉をかじって食べるため細長い穴が開きます。枯れ木の場合は材の表面に筋のような痕を残すものもあります。



＜ポイント③ カミキリムシが活動する時期＞

そして最後に大切なのが時期です。カミキリムシは4月の後半から7月の初旬に多く見ることができます。当センターでもこの夏、多くのカミキリムシを確認できました。みなさんも自然観察園や身近な場所でカミキリムシを探してみてください。



フチグロツヤボシカミキリと
ホオノキの葉についた食痕



スイカズラにつくシラハタリンゴカミキリ
と葉についた食痕

自然環境保全センターで確認したカミキリムシ 41種（令和5年5月～8月）

ホソカミキリ、ウスバカミキリ、ノコギリカミキリ、アカハナカミキリ、オオヨツスジカミキリ、ミヤマカミキリ、キマダラミヤマカミキリ、テツイロヒメカミキリ、ルリボシカミキリ、アオカミキリ、ヘリグロベニカミキリ、ベニカミキリ、チャイロホソヒラタカミキリ、クビアカトラカミキリ、ウスイロトラカミキリ、キスジトラカミキリ、ヨツスジトラカミキリ、キイロトラカミキリ、トゲヒゲトラカミキリ、トガリバアカネトラカミキリ、ゴマフカミキリ、カタシロゴマフカミキリ、ナガゴマフカミキリ、ヒシカミキリ、アトジロサビカミキリ、ヒメヒゲナガカミキリ、ニセビロウドカミキリ、キボシカミキリ、エゾナガヒゲカミキリ、セミスジゴヒゲカミキリ、ヒトオビアラゲカミキリ、ドイカミキリ、ホウノキトゲバカミキリ、アトモンマルケシカミキリ、クモガタケシカミキリ、フチグロヤツボシカミキリ、ハンノキカミキリ、ラミーカミキリ、ヒゲナガヒメリカミキリ、シラホシカミキリ、シラハタリンゴカミキリ

傷病鳥獣救護の情報

※救護の情報やバックナンバーは、ホームページで見られます。

神奈川県 野生動物救護

検索

当センターでは、傷病鳥獣の救護業務として、県民の方により持ち込まれた県内の傷ついたり弱ったりした野生動物（鳥類と哺乳類の一部）を收容し、必要に応じて治療やリハビリを行い、野生に戻す業務を行っています。この「かわせみ通信」では、持ち込まれた野生動物の「救護原因」や「リハビリ状況」などの情報を掲載しています。

●●● 2023年4月～6月の実績 ●●●

3ヶ月間で受け入れた総数は、哺乳類12頭でした。

救護件数上位種		主な救護原因(人為的要因による)			
種名	件数	鳥類	件数	哺乳類の原因	件数
タヌキ	12	※鳥インフルエンザ対策の為、2022年9月26日から当面の間、鳥類の受け入れを中止しています。		誤認保護	6
				疥癬症(かいせんしょう)	4
				交通事故	1
				不明	1



←
令和5年度1番はじめ(4月上旬)に持ち込まれた疥癬症のタヌキです。
治療が終わり、6月に放野できました！

「第32回公園緑花まつり」出展報告

伊勢原市総合運動公園で令和5年5月13日(土)14日(日)に開催された「第32回公園緑花まつり」(主催:伊勢原市)に普及啓発の一環として出展して来ました。今回の展示タイトルは、「知ってる?伊勢原にいる野生の動物たち」です。伊勢原市内に生息する哺乳類と鳥類の剥製(はくせい)16種18点を展示しながら、ポスターではよく持ち込まれる救護原因の中からメジロがネコに襲われる、キジバトの衝突、タヌキの交通事故、スズメの誤認保護、タヌキの疥癬症(かいせんしょう)などを紹介しました。



展示風景

クイズの答えは
図鑑やインターネットで
調べてみよう♪



クイズにチャレンジ中の参加者に解説をする職員(左)

<クイズ>

ヤマドリは誰の仲間？

①キジの仲間

②タカの仲間

③カモの仲間



はくせいクイズの例



①だれかなあ？

②どうしたのかなあ？

③どうしよう？

救護クイズの例

開催日は両日も曇りや雨といった天気でしたが、来場してくださった方には【はくせいクイズ】や【救護クイズ】にチャレンジいただき、職員が解説を加える形で、できるかぎり来場者の方々と職員がコミュニケーションを多くとれるように展示を工夫しました。剥製(はくせい)を見た方からは、「見たことがない」「見たことはあるが名前がわからない」「ハクビシンはどれ？」といった質問が多く寄せられ、実物を見たことがある方でも、間近でじっくり見ることが少ないヤマドリやイワツバメなどの細かな模様や色などに感心されていました。また、アナグマをタヌキに、メジロをウグイスに間違える方もいらっしゃいました。この出展でひとりでも多くの方に身近な野生動物に興味を持っていただける機会になればと思います。

今回は、私たち職員にとっても久しぶりに対面で普及啓発をすることができ、とても良い刺激をいただくことができました。

現在、高病原性鳥インフルエンザの防疫対策強化を行っていることから、鳥類の受け入れを再開するまでは、受付所を屋内から屋外に移し、仮設テントで救護対象種のうち、哺乳類のみ受け入れをしています。お持ち込みを希望の方は、まずはお電話にてご相談の上、下記写真の流れにそって手続きしますので、ご注意ください。また、仮設受付所から離れた場所で動物の治療やケアなどを行っていますので、③の呼び鈴を押しても、職員が受付所に到着するまでお待ちいただく場合がございます。何卒ご理解とご協力をよろしくお願い致します。

仮設受付所内の手順



① 研究棟前にある
受付所(白いテント)の中へ入る



② 動物を赤い台車に入れ物ごと乗せる



③ 呼び鈴を押して職員が来るのを待つ

SNSを活用した普及啓発で再生回数が840万回以上を突破！



令和5年度開始から8月まで、仔タヌキ7頭を受け入れました。眼が開いていない、へその緒がついたままの生まれて間もない状態の個体が多く、うち3頭は受け入れた数日後に残念ながら亡くなってしまいました。

救護原因もネコやイヌと間違えて保護した事例(誤認保護)ばかり……。それを受け、SNSで誤認保護を防止するための注意喚起の発信をしたところ、多くの反響や取材をいただきました。

今回のことで、野生動物の救護活動にとどまらず、広く自然との共生についての課題を考えるきっかけになったのではないかと思います。一方で、タヌキとイヌやネコの赤ちゃんの見分け方が分からないなどのご相談もいただきましたので、今後の普及啓発に役立てていきたいと思っています。

タヌキの放野報告

※1 疥癬症(かいせんしょう)については「かわせみ通信 第15号」を見てね!

令和5年4月下旬に疥癬症(かいせんしょう)で受け入れたタヌキは、お尻周辺に何者かに咬まれたと思われる傷があり、疥癬症と傷の治療を同時進行しました。幸い傷は早く治り、疥癬症の治療も完了したため、7月中旬に放野することができました。



受け入れて間もない疥癬症のタヌキ



放野前日の様子

35℃以上の暑い日が続き、熱中症予防のために、水の中にコオロギを入れて凍らせたものをタヌキに与えました。氷をなめてヒンヤリできたかな?